

# 年少者日本語教育における日本語・母語学習指導基準の 教師の属性による特徴の分析

岡崎敏雄

## 1. はじめに

—日本語・母語学習指導基準に関する意思決定の学校・教師の属性別特徴—  
前稿で、それぞれのカテゴリ内での意思決定、特に指導基準に関わる決定のうち、教科指導基準を中心とした基準の有りように対する評定が、年少者日本語教育に関わる学校や教師の属性別にどのような特徴を示すかに注目して分析した。本稿は日本語・母語学習指導基準を中心として分析する。

## 2. 日本滞在中の重視内容

重回帰分析の結果、以下が明らかとなった。

### 目的変数

「1-35 日本滞在中は、楽しく過ごし、楽しかった思い出を持って帰国してもらおうことを最も重要視する」

決定係数：0.05, 自由度修正済み決定係数：0.05

### 説明変数 1

小・中学校の区別 (F = 161.9981, 有意差：あり (P < 0.01\*\*))

評定平均値：小学校：5.09, 中学校：4.55, 有意差：あり (P < 0.01\*\*)

### 説明変数 2

親の職業 (F = 31.58971, 有意差：あり (P < 0.01\*\*))

評定平均値：工場・建設業等労働者：4.89, 留学生・研究者：5.37, 有意差：あり (P < 0.01\*\*)

## 説明変数 3

教師・講師の経験年数 ( $F = 30.35875$ , 有意差: あり ( $P < 0.01^{**}$ ))  
 ボン・フェローニ多重比較の結果, どの平均値間にも有意差あり  
 ( $P < 0.01^{**}$ )

## 説明変数 4

教師の年齢 ( $F = 21.43654$ , 有意差: あり ( $P < 0.01^{**}$ ))  
 評定平均値: 20代: 5.05, 30代: 4.79, 40代: 5.01, 50代以上: 5.23  
 ボン・フェローニ多重比較の結果, 20代と40代, 20代と50代以上の間を除き,  
 いずれも有意差あり ( $P < 0.01^{**}$ )

## 目的変数

「1-36 日本滞在中は, 学力や他の能力を伸ばすことを最も重要視する」  
 決定係数: 0.02, 自由度修正済み決定係数: 0.02

## 説明変数 1

教師・講師の経験年数 ( $F = 38.53027$ , 有意差: あり ( $P < 0.01^{**}$ ))  
 評定平均値: 1-4年: 4.28, 5-10年: 3.98, 10年以上: 3.99  
 ボン・フェローニ多重比較の結果: 「5-10年」と「10年以上」の間を除き,  
 有意差あり ( $P < 0.01^{**}$ )

## 説明変数 2

父母との懇談経験 ( $F = 11.07625$ , 有意差: あり ( $P < 0.01^{**}$ ))  
 評定平均値: 殆どない: 3.96, 1時間程度の懇談経験: 4.02, 1時間以上の  
 経験がある: 4.09  
 ボン・フェローニ多重比較の結果: 「殆どない」と「1時間程度の懇談経験」  
 との間を除き, 有意差あり ( $P < 0.01^{**}$ )  
 「1時間程度の懇談経験」と「1時間以上の懇談経験」の間にも有意差あり  
 ( $P < 0.05^*$ )

「日本滞在中の重視内容」のうち, 「1-35 日本滞在中は, 楽しく過ごし, 楽しかった思い出を持って帰国してもらうことを最重要視する」の意思決定に影

響を与える教師の属性として以下の4つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ1. 小学校の教師は中学校の教師よりも、2. 担当している外国人年少者の親の職業が留学生や研究者の場合には、工場・建設業等労働者の親を担当している教師の場合よりも、3. 教師・講師の経験年数が4年以下、10年以上、5～10年の経験年数の順で、また、4. 教師の年齢については、20代と40代以上の間で差がないのを除き、50代以上、20代と40代、30代の順で高い評定値を与えることが明らかとなった。

このうち進学や就職などの心配を余りしなくて済むと思われる小学校の方が高い評定値で、また、親の職業としては、留学生や研究者の親の方が高い評定値を与えていることが注目される。

「1-36 日本滞在中は、学力や他の能力を伸ばすことを最も重要視する」という意思決定に影響を与える教師の属性として以下の2つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ1. 教師・講師の経験年数については、経験年数4年以下の教師は5年以上の教師よりも、2. 父母との懇談経験が1時間以上の経験のある教師はそれ未満の教師よりも高い評定値を与えることが明らかとなった。このうち教師・講師の経験年数については、前項と並んで経験年数4年以下の教師が高い評定値を示していることが注目される。ただし評定平均値は前項の方がかなり高いことから相対的には前項をより重視していることも示されている。

### 3. 学校での母語支援の態様

重回帰分析の結果、以下が明らかとなった。

#### 目的変数

「1-37 子供が日本語が全くできない場合に、子供の母語のできるボランティアを在籍学級に用意して付き添い参加してもらう」

決定係数：0.02，自由度修正済み決定係数：0.02

#### 説明変数1

ボランティアへの依頼（ $F = 14.75717$ ，有意差：あり（ $P < 0.01^{**}$ ））

評定平均値：学校がボランティアを依頼している：5.28，していない：5.12，有意差：あり（ $P < 0.01^{**}$ ）

## 説明変数 2

外国語学習経験 ( $F = 12.20352$ , 有意差:あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値: 日常会話ができる外国語がある: 4.68, ない: 4.87, 有意差: あり ( $P < 0.01^{**}$ )

## 目的変数

「1-38 母語が話せる人が外国人年少者の指導にかかわるようにする」

決定係数: 0.03, 自由度修正済み決定係数: 0.03

## 説明変数 1

取り出し指導の有無 ( $F = 28.67377$ , 有意差:あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値: 取り出し指導あり: 5.19, なし: 5.00, 有意差: あり ( $P < 0.01^{**}$ )

## 説明変数 2

親の職業 ( $F = 27.14325$ , 有意差:あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値: 工場・建設業等労働者: 5.20, 留学生・研究者: 4.85, 有意差: あり ( $P < 0.01^{**}$ )

## 説明変数 3

小・中学校の区別 ( $F = 17.41919$ , 有意差:あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値: 小学校: 5.08, 中学校: 5.29, 有意差: あり ( $P < 0.01^{**}$ )

## 説明変数 4

全校の外国人年少者数 ( $F = 13.86278$ , 有意差:あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値: 1人: 5.11, 2-4人: 5.14, 5-9人: 5.14, 10-19人: 5.08, 20-29人: 5.09, 30人以上: 5.39。

ボン・フェローニ多重比較の結果: 1人と30人以上, 2-4人と30人以上, 5-9人と30人以上, 10-19人と30人以上に有意差あり。 ( $P < 0.01^{**}$ )  
20-29人と30人以上の間で有意差あり。 ( $P < 0.05^*$ )

目的変数

「1-39 母語ができる人をきちんと教員として採用し、教えてもらうことが望ましい」

決定係数：0.03, 自由度修正済み決定係数：0.02

説明変数 1

親の職業 (F = 25.64031, 有意差：あり (P < 0.01\*\*))

評定平均値：工場・建設業等労働者：5.31, 留学生・研究者：4.91, 有意差：あり (P < 0.01\*\*)

説明変数 2

小・中学校の区別 (F = 24.53823, 有意差：あり (P < 0.01\*\*))

評定平均値：小学校：5.18, 中学校：5.40, 有意差：あり (P < 0.01\*\*)

説明変数 3

取り出し指導の有無 (F = 21.07147, 有意差：あり (P < 0.01\*\*))

評定平均値：取り出し指導あり：5.29, なし：5.09, 有意差：あり (P < 0.01\*\*)

説明変数 4

学校全体の外国人年少者数 (F = 13.13504, 有意差：あり (P < 0.01\*\*))

重機回帰分析のための数値配置：学校全体の外国人年少者数：1人：1, 2-4人：2, 5-9人：3, 10-19人：4, 20-29人：5, 30人以上：6

評定平均値：1人：5.14, 2-4人：5.21, 5-9人：5.22, 10-19人：5.25, 20-29人：5.31, 30人以上：5.59。

ボン・フェローニ多重比較の結果：1人と30人以上, 2-4人と30人以上, 5-9人と30人以上, 10-19人と30人以上の間に有意差あり。(P < 0.01\*\*)

説明変数 5

外国語学習経験 (F = 11.01661, 有意差：あり (P < 0.01\*\*))

評定平均値：日常会話ができる外国語がある：5.09, ない：5.26, 有意差：あり (P < 0.01\*\*)

「学校での母語支援の態様」のうち、「1-37 子供が日本語が全くできない場合に、子供の母語のできるボランティアを在籍学級に用意して付き添い参加してもらう」の意思決定に影響を与える教師の属性として以下の2つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ1. 学校がボランティアを依頼している場合の教師は依頼していない場合の教師よりも、また、2. 外国語学習経験については、日常会話ができる外国語のない教師はある教師よりもこの意思決定に高い評定値を与えていることが明らかとなった。

「1-38 母語が話せる人が外国人年少者の指導にかかわるようにする」の意思決定に影響を与える教師の属性として以下の4つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ1. 学校で取り出し教室を設定している場合の教師は設定していない教師よりも、2. 担当している外国人年少者の親の職業が工場・建設業等労働者の場合には、留学生や研修者の親を担当している教師の場合よりも、3. 中学校の教師は小学校の教師よりも、また、4. 所属している学校の全校外国人年少者数が30人以上と30人未満を比較した場合には、30人以上の教師の場合の方がこの意思決定に高い評定値を与えていることが明らかとなった。

「1-39 母語ができる人をきちんと教員として採用し、教えてもらうことが望ましい」の意思決定に影響を与えている教師の属性として以下の5つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ1. 担当している外国人年少者の親の職業が工場・建設業等労働者の場合には、留学生や研修者の親を担当している教師よりも、2. 中学校の教員は小学校の教員よりも、3. 学校として取り出し教室を設置している場合の教師は設置していない教師よりも、4. 所属している学校の全校外国人年少者数が30人以上の学校の教師はそれ未満の学校の教師よりも、また、5. 外国語学習経験については、日常会話ができる外国語のない教師はある教師よりもこの意思決定に高い評定を与えていることが明らかとなった。

以上のうち、所属している学校の全校外国人年少者数が30人以上である場合の教師と30人未満の場合の教師の間での違いが影響を与えていること、および中学校の教師の方が小学校の教師よりも母語話者の支援や教員としての採用を高く評価していること、さらに親の職業が何であるかによって教師が母語話者の教師の採用の評定が異なる点が注目される。

#### 4. 日本の学校編入前の日本語教育

重回帰分析の結果、以下が明らかとなった。

##### 目的変数

「1-40 学校へ編入する前に日本語学習をする場所を設けるべきである」  
決定係数：0.04, 自由度修正済み決定係数：0.04

##### 説明変数 1

小・中学校の区別 (F = 118.0305, 有意差：あり (P < 0.01\*\*))  
評定平均値：小学校：4.80, 中学校：5.34, 有意差：あり (P < 0.01\*\*)

##### 説明変数 2

親の職業 (F = 19.59559)  
評定平均値：工場・建設業等労働者：5.02, 留学生・研究者：4.59, 有意差：あり (P < 0.01\*\*)

「日本の学校編入前の日本語教育」の意思決定については、以下の2つの属性が影響を与えており、影響度の大きい順に1. 中学校の教員は小学校の教員よりも、また、2. 担当している外国人年少者の親の職業が工場・建設業等労働者の場合の教師は、留学生・研究者の場合の教師よりも高く評定していることが明らかとなった。またその場合、小・中学校の区別の属性が極めて高いF値に基づく良い影響度を与えていることから、中学校の教員は極めて強い必要性を認識していることが明らかに示されている。

#### 5. 家庭での使用言語への対応

重回帰分析の結果、以下が明らかとなった。

##### 目的変数

「1-41 外国人年少者が家庭で母語、日本語をどの程度使っているかを把握することに努める」  
決定係数：0.03, 自由度修正済み決定係数：0.03

## 説明変数 1

父母との懇談経験 ( $F = 39.08291$ , 有意差:あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値:殆どない:5.19, 1時間程度の懇談経験:5.24, それ以上の経験がある:5.43

ボン・フェローニ多重比較の結果, 「殆どない」と「1時間程度の懇談経験がある」との間を除き, いずれも有意差あり ( $P < 0.01^{**}$ )

## 説明変数 2

親の滞在予定期間 ( $F = 29.67681$ , 有意差:あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値:日本短期滞在后帰国希望:5.22, 日本永住希望:5.35, 有意差:あり ( $P < 0.01^{**}$ )

## 説明変数 3

教師の年齢 ( $F = 25.28972$ , 有意差:あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値:20代:5.48, 30代:5.30, 40代:5.23, 50代以上:5.12

ボン・フェローニ多重比較の結果, 20代と30代の間を除き, いずれも有意差あり ( $P < 0.01^{**}$ )

## 目的変数

「1-42 家庭では母語で会話するように父母に依頼する」

決定係数:0.03, 自由度修正済み決定係数:0.03

## 説明変数 1

これまで指導した外国人年少者数 ( $F = 30.64129$ , 有意差:あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値:1人:3.71, 2-4人:3.80, 5-9人:3.91, 10人以上:4.28

ボン・フェローニ多重比較の結果:2-4人と5-9人の間, 有意差あり ( $P < 0.05^*$ )。その他はいずれも有意差あり ( $P < 0.01^{**}$ )

## 説明変数 2

外国人年少者に対する研修の受講 ( $F = 22.32948$ , 有意差:あり ( $P < 0.01^{**}$ ))



評定平均値：研修経験あり：4.08, なし：3.77, 有意差：あり ( $P < 0.01^{**}$ )

### 説明変数 3

母語保持への親の希望 ( $F = 15.67777$ , 有意差：あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値：親は子供の母語の保持を希望している：3.93, していない：  
3.79, 有意差：あり ( $P < 0.01^{**}$ )

### 目的変数

「1-43 家庭でもできるだけ多く日本語を使うように父母に依頼する」

決定係数：0.02, 自由度修正済み決定係数：0.02

### 説明変数 1

教師・講師の経験年数 ( $F = 18.1617$ , 有意差：あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値：1-4年：4.12, 5-10年：4.00, 10年以上：4.02

ボン・フェローニ多重比較の結果, 「5-10年」と「10年以上」の間を除き,  
有意差あり ( $P < 0.05^{*}$ )

### 説明変数 2

家庭での使用言語 ( $F = 16.9692$ ), 有意差：あり ( $P < 0.01^{**}$ )

評定平均値：母語を使うようにしている：3.93, 日本語を使うようにして  
いる：4.25, 特にどちらでもない：4.12

ボン・フェローニ多重比較の結果, いずれも有意差あり (特に「日本語を  
使うようにしている」と「特にどちらでもない」 $P < 0.05^{*}$ , 他はいずれ  
も  $P < 0.01^{**}$ )

### 説明変数 3

外国語学習経験 ( $F = 16.49092$ , 有意差：あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値：日常会話ができる外国語がある：3.91, ない：4.05, 有意差：  
あり ( $P < 0.01^{**}$ )

### 説明変数 4

親の滞在予定期間 ( $F = 11.65229$ , 有意差：あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値：日本短期滞在后帰国希望：3.95，日本永住希望：4.13，有意差：あり ( $P < 0.01^{**}$ )

「家庭での使用言語への対応」のうち、「1-41 外国人年少者が家庭で母語、日本語をどの程度使っているかを把握することに努める」の意思決定に影響を与える教師の属性として以下の3つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ1. 外国人年少者の父母との懇談経験が1時間以上の経験がある教師は、1時間未満の教師よりも、2. 担当している外国人年少者の親の滞在予定期間が日本永住希望の親の場合は、日本短期滞在后帰国希望の親を担当している教師の場合よりも、また、3. 教師の年齢が20代と30代の間で有意な差がないのを除き、年齢層が若い教師の場合には年長の教師よりもこの意思決定に高い評定値を与えていることが明らかとなった。

「1-42 家庭では母語で会話するように父母に依頼する」の意思決定に影響を与える教師の属性として以下の3つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ1. これまで指導してきた外国人年少者の数が多ければ多いほど、2. 外国人年少者に対する研修の受講経験がある教師はない教師よりも、また、3. 担当している外国人年少者の親の希望として、子供の母語の保持を希望している親を担当している教師は、子供の母語保持を希望していない親の場合の教師よりもこの意思決定に高い評定を与えていることが明らかとなった。

「1-43 家庭でもできるだけ多く日本語を使うように父母に依頼する」の意思決定に影響を与えている教師の属性として以下の4つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ1. 教師・講師の経験年数が4年以下の教師は5年以上の教師よりも、2. 担当している外国人年少者の家庭での使用言語で「日本語を使うようにしている」とする家庭を担当している教師、「特にどちらでもない」の場合の教師、「母語を使うようにしている」場合の教師の順で、3. 外国語学習経験については、日常会話のできる外国語のない教師は、ある教師の場合よりも、4. 担当している外国人年少者の親の滞在予定期間として、日本永住希望の親の場合の教師は、日本短期滞在后帰国希望の親を担当している教師の場合よりも高い評定値を与えていることが明らかとなった。

このうち家庭での使用言語に関する情報収集については、父母との懇談経験や親の滞在予定期間がどうであるかが影響を与えていること、またその場合、若い世代の教師の方が情報収集の必要性を認識していること、家庭での母語使

用を依頼する教師として、指導した外国人年少者数の10人以上と多い教師、研修経験のある教師が多いこと、また、親が母語保持を希望している場合には、それに添った形で対応することが必要だと考えている教師が多いこと、さらにそれと対照的な家庭での使用言語である日本語の使用を依頼する場合には、親の希望や指導した外国人年少者の数は上がって来ず、教師・講師の経験年数で4年以下のものが影響力の強いものとして上がっていることが注目される。

また、日常会話のできる外国語のない教師の方がある教師よりも日本語を家でも使うように依頼していることも予想されることではあるが、注目される。

## 6. 家庭学習への対応

重回帰分析の結果、以下が明らかとなった。

### 目的変数

「1-44 家庭で父母が勉強を見るように依頼する」

決定係数：0.02, 自由度修正済み決定係数：0.02

### 説明変数 1

これまで指導した外国人年少者数 ( $F = 16.36787$ , 有意差：あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値：1人：4.02, 2-4人：3.98, 5-9人：4.05, 10人以上：4.31  
ボン・フェローニ多重比較の結果：1人と10人以上, 2-4人と10人以上, 5-9人と10人以上の間, いずれも有意差あり ( $P < 0.01^{**}$ )

### 説明変数 2

教師の年齢 ( $F = 15.36665$ , 有意差：あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値：20代：4.22, 30代：4.07, 40代：3.95, 50代以上：3.93  
ボン・フェローニ多重比較の結果：40代と50代以上の間を除きいずれも有意差あり ( $P < 0.01^{**}$ )

### 説明変数 3

教師・講師の経験年数 ( $F = 13.5102$ , 有意差：あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値：1-4年：4.29, 5-10年：4.10, 10年以上：3.96

ボン・フェローニ多重比較の結果、「1-4年」と「5-10年」の間を除き、有意差あり ( $P < 0.01^{**}$ )

#### 説明変数 4

父母との懇談経験 ( $F = 13.23642$ , 有意差：あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値：殆どない：3.99, 1時間程度の懇談経験：4.01, それ以上の経験がある：4.11

ボン・フェローニ多重比較の結果、「殆どない」と「1時間程度の懇談経験がある」との間を除き、いずれも有意差あり ( $P < 0.01^{**}$ )

「家庭学習への対応」の意思決定に影響を与える教師の属性として以下の4つがあり、影響度の大きい順にそれぞれ1. これまで指導した外国人年少者数が10人以上ある教師の場合は、それ未満の教師の場合よりも、2. 教師の年齢については、40代と50代以上の間で差がないのを除き、若い世代の教師は年長の教師よりも、3. 教師・講師の経験年数が10年未満の教師の方が10年以上の教師よりも、また、4. 父母との懇談経験が1時間以上ある場合はそれ未満の教師よりもこの意思決定を高く評定することが示された。

## 7. 母語の歌・遊び・考え方経験の機会

重回帰分析の結果、以下が明らかとなった。

#### 目的変数

「1-45 外国人年少者が母国の歌、遊び、考え方などを日本人の子供に紹介するような機会を多く持たせるようにする」

決定係数：0.05, 自由度修正済み決定係数：0.05

#### 説明変数 1

小・中学校の区別 ( $F = 49.51923$ , 有意差：あり ( $P < 0.01^{**}$ ))

評定平均値：小学校：5.52, 中学校：5.30

説明変数 2

父母との懇談経験 (F = 40.29677, 有意差: あり (P < 0.01\*\*))

評定平均値: 殆どない: 5.33, 1時間程度の懇談経験: 5.43, それ以上の  
経験がある: 5.62

ボン・フェローニ多重比較の結果: いずれも有意差あり (P < 0.01\*\*)

説明変数 3

教師・講師の経験年数 (F = 33.52214, 有意差: あり (P < 0.01\*\*))

評定平均値: 1-4年: 5.66, 5-10年: 5.44, 10年以上: 5.43

ボン・フェローニ多重比較の結果: 「5-10年」と「10年以上」の間を除  
き, 有意差あり (P < 0.01\*\*)

説明変数 4

教員の加配 (F = 16.01334, 有意差: あり (P < 0.01\*\*))

評定平均値: 加配あり: 5.59, なし: 5.39, 有意差: あり (P < 0.01\*\*)

以上により, 「母語の歌・遊び・考え方経験の機会」の意思決定に影響を与  
える教師の属性として以下の4つがあり, 影響度の大きい順にそれぞれ1. 小  
学校の教員は中学校の教員よりも, 2. 父母との懇談経験が多ければ多いほ  
ど, 3. 教師・講師の経験年数が5年以上の場合には, 4年以下の場合よりも,  
また, 4. 教員の加配のある学校の教師はない学校の教師よりもこの意思決定  
に高い評定を与えていることが明らかとなった。

参考文献

- 岡崎敏雄 (1995) 「年少者言語教育研究の再構成」『日本語教育』Vol. 86, pp. 1-12  
——— (1996) 「応用言語学の課題 (1): 年少者言語教育研究の再構成—社会・  
文化的視点から—」『筑波応用言語学』Vol. 3, pp. 1-12  
——— (1997) 「応用言語学の課題 (2): 年少者言語教育研究の再構成—社会・  
文化的視点から再考—」『筑波応用言語学』Vol. 4, pp. 1-12  
——— (1998) 「応用言語学研究 (1): 年少者日本語教育と母語保持研究 (1)」  
『文藝言語研究・言語編』Vol. 34, pp. 157-75

- (1999) 「応用言語学研究 (2) : 年少者日本語教育と母語保持研究 (2)」  
【文藝言語研究・言語編】 Vol. 36, pp. 51-67
- (2000) 「年少者日本語教育にかかわる教師の属性による言語教育観の違い  
の分析 (2)」【文藝言語研究・言語編】 Vol. 38, pp. 17-42
- (2001 a) 「年少者日本語教育に関わる教師の意志決定の研究」【文藝言語  
研究・言語編】 Vol. 39, pp. 31-44
- (2001 b) 「年少者日本語教育に関わる教師の指導基準」【文藝言語研究・  
言語編】 Vol. 40, pp. 27-39
- (2002 a) 「年少者日本語教育における意志決定のパターンの分析」【文藝・  
言語研究・言語編】 Vol. 41, pp. 43-55.
- (2002 b) 「年少者日本語教育における指導基準の教師の属性による特徴の  
分析」【文藝・言語研究・言語編】 Vol. 42, pp. 125-137.
- (2003) 「年少者日本語教育における教科指導基準の教師の属性による特徴  
の分析」【文藝・言語研究・言語編】 Vol. 43, pp. 8-21.
- 岡崎敏雄・西川寿美 (1993) 「学習者とのやりとりを通じた教師の成長」【日本語学】  
Vol. 2, No. 3, pp. 31-41, 明治書院
- 塩地満美子 (1995) 「外国人年少者日本語教師の言語教育観, 意思決定と判断」筑波  
大学大学院地域研究研究科修士論文
- 西原鈴子編 (1994) 「在日外国人と日本人の言語接触における相互理解メカニズム」  
国立国語研究所
- 箕浦康子 (1991) 「子供の異文化体験」東京: 思索社
- Baker, C. 1993. *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*. Cleave-  
don, England: Multilingual Matters.
- Baker, K. & A. de Kanter. 1981. *Effectiveness of Bilingual Education*. U.S. De-  
partment of Education: Washington D.C.
- Beardsmore, H. B. 1993. *European Models of Bilingual Education*. Cleavedon,  
England: Multilingual Matters.
- Bhatnagar, J. 1980. Linguistic behaviour and adjustment of immigrant children  
in French and English schools in Montreal. *International Review of Ap-  
plied Psychology* 29: 141-58.
- Bruck, M., H. Jakimik and G. R. Tucker. 1976. Are French Programs suitable  
for working class children? In Engel, W. (ed.) *Prospects in child lan-  
guage*. Royal Vangorcum, Amsterdam.
- Carringer, D. C. 1974. Creative thinking abilities of Mexican youth. *Journal of  
Cross Cultural Psychology* 5: 492-504.
- Clyne, M. 1991. Community Languages. *The Australian experiences*. Cambridge  
University Press.
- Cummins, J. 1978. Bilingualism and the development of metalinguistic aware-  
ness. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 9 (2): 131-49.
- . 1980. The entry and exit fallacy in bilingual education. *NABE Journal*

- 4: 25-60.
- . 1981a. The role of primary language development in promoting educational success for language minority students. In California State Department of Education (Ed.) *Schooling and language minority students*. California State University.
- . 1981b. Age on arrival and immigrant second language learning. *Applied Linguistics* 2: 132-49.
- . 1982. *Interdependence and bicultural ambivalence*. National Clearinghouse for Bilingual Education, Rosslyn, Virginia.
- . 1987. Theory and policy in bilingual education. *Multicultural Education*. California educational research and innovation, OECD: Paris.
- . 1996. *Negotiating Identities: Education for empowerment in a diverse society*. Ontario, CA: California Association for Bilingual Education.
- and K. Nakajima. 1987. Age of arrival, length of residence, and interdependence of literacy skills among Japanese immigrant students. In B. Harley, P. Allen, J. Cummins, and M. Swain (eds.). *The development of bilingual proficiency: final report*. Toronto: Modern Language Center, O. I.S.E. [ED 291248].
- and Swain. 1986. *Bilingualism in Education*. London: Longman.
- Diaz, R. 1985. Bilingual cognitive development. *Child development* 56, 1376-88.
- Fishman J. 1976. *Bilingual Education*. Rowley, Mass.: Newbury House.
- Gardner, R. C. and W. E. Lambert. 1972. *Attitude and Motivation in Second Language Learning*. Newbury House, Rowley, Massachusetts.
- Gibson, M. A. and J. U. Ogbu. (ed.) 1991. *Minority Status and Schooling: A comparative study of immigrant and involuntary minorities*. New York: Garland Publishing.
- Harley, B., P. Allen, J. Cummins and M. Swain. 1990. *Development of Second Language Proficiency*. Cambridge University Press.
- Ianco-Worrall, A. 1972. Bilingualism and cognitive development. *Child Development* 43: 1390-1400.
- Lambert, W. E. 1977. The effects of bilingualism on the individuals cognitive and sociocultural consequences. In Hornby, P. A. (ed.) *Bilingualism*. 15-27. Academic Press.
- Marshall, D. F. 1991. *Language Planning*. Focusschrift in honour of J. A. Fishman. John Benjamins.
- Morgan, G. 1996. An investigation into the achievement of African-Caribbean pupils. *Multicultural Teaching*, 14: 2, 37-40.
- Ogbu, J. U. 1992. Understanding cultural diversity and learning. *Educational Researcher*, 21(8), 5-14 & 24.
- Okazaki. 1997b. Japanese language education with the perspective of multilingual and multicultural symbiosis: paper presented at JSAA conference

at Melbourne, Australia.

- Paulston, C. 1992. *Sociolinguistic Perspectives on Bilingual Education*. Clevedon, England: Multilingual Matters.
- Ramirez, J. D. 1992. Executive summary. *Bilingual Research Journal*, 16, 1-62.
- Rees, O. 1981. Mother tongue and English Project. In Commission for Racial Equality (ed.) *Mother tongue teaching report*, Bradford College.
- Reid, E. and H. Reich (eds.). 1992. *Breaking the Boundaries: Migrant workers' children in the EC*. Clevedon, England: Multilingual Matters.
- Romaine, S. 1993. *Bilingualism*. Blackwell.
- Skutnabb-Kangas, T. and T. Toukomaa. 1976. *Teaching migrant children's mother tongue and learning the language of the host country in the context of the sociocultural situation of the migrant family*. The Finnish National Commission for UNESCO, Helsinki.
- Spence, A. G., S. P. Mishra and S. Ghozeil. 1971. Home language and performance on standardized tests. *Elementary School Journal* 71: 309-13.
- Swain, M. 1978. Home-school language learning issues and approaches. 238-51. Newbury House.
- Wong-Fillmore, L. 1983. The language learner as an individual. In Clarke M. and J. Handscombe (Eds.). *On TESOL '82: Pacific perspective on language learning and teaching*. Washington D.C.: TESOL.